「理性と信仰(faith)の関係」及び「誤った信仰(belief)」

タマス・フォルデジ

米統一神学校哲学助教授

理性と信仰という問題は、諸宗教の最も重要な問題の一つである。なぜならば、諸宗教の教義はおもに信仰に基づいていながら、理性もまたその教義の正当化に重要な役割を果たしているからである。しかしまた理性と信仰の関係は、世俗の認識論においても重要な問題である。

しかしながら、このテーマに関する文献は豊富にあるが、いくつか論争中で未解決の問題がある。その一つの特徴は、宗教的な見解と世俗的な見解とでは互いに根本的に違うということである。

この違いを述べるために、異なる百科事典で定義されている内容から見ていこう。新ハンガリー百科事典によれば、「信仰とは、経験的にも論理的にも証明されない仮定を受入れることである。これとは反対に、理性は、認識の最高段階である。」（新ハンガリー百科事典３　アカデミー出版社　1962 年　p.287）とされている。ここでの信仰と理性の定義を比べるならば、理性の方が信仰よりも価値があることは明らかである。

しかし、ハンガリー・ブリタニカによる定義を考慮に入れるならば、全く異なった結果に行き着く。ハンガリー・ブリタニカによれば、「信仰とは、人間を神につなぐ内的な信頼であり確信である。キリスト教神学では、信仰とは神によって呼び起こされた応答である。」（ハンガリー･ブリタニカ＆ブダペスト　1998 年　p.700）とされている。言うまでもなく、この定義は先の定義とは全く異なっている。ここでは信仰は理性より低次のものではない。このアプローチの違いの原因は何であろうか。最初の百科事典は、ハンガリーで社会主義時代の 1960 年代に出版されたものであり、第二の百科事典は、社会主義体制崩壊以後の 1990 年代に出版されたものである。最初の百科事典は、世俗的な見解に基づいたものであり、日常の習慣のみを考慮に入れ、超自然的なものの領域を否定したものである。それは、宗教とは相容れない、官僚の公式見解を反映したものである。それに対して第二の百科事典は、宗教をより高次のものとして理解したものであり、ハンガリー社会の民主主義への転換を反映したものである。

次に本論文では、世俗的な学説と宗教的な学説の簡単な歴史を扱うことにする。ここでは世俗的な学説の歴史は、「無神論と不可知論」という２つの理論を含んでおり、宗教的な学説の歴史は、キリスト教神学に限定する。

世俗的な学説は、啓蒙主義の伝統に根ざしており、歴史上、早期のものではない。なぜなら通例、古代においても中世においても、無神論者は死刑宣告に処せられたからである。（ソクラテスの審判を見よ）

啓蒙主義のおもなスローガンは、次のようなものであった。「すべてのものは、理性という法廷の裁きの場の前にもたらされるべきである。」このような試験の結果、「主題が理性と調和し、それゆえその主題は容認できる」か、「主題が理性と調和せず、それゆえその主題は容認できない」かのどちらかに二分されることになる。啓蒙主義のこの方法論は、信仰にとって致命的なものとなったと言える。絶対的な合理主義に従えば、理性は、世界のあらゆる問題を解決することができるので、信仰は、余分で不要なものとなる。Ch.ヴォルフは次のように述べている。「理性で、我々人間や世界、神のこと全てを知ることができる。」カントによれば、理性と調和するものしか認識できない。（Mc グラス: キリスト教神学入門　オシリス出版社　1995 年　p.179-180）

啓蒙主義の哲学者による綿密な批判は、奇跡に集中的に向けられた。ヒュームは、「奇跡はあり得ず、証明できない。」と述べている。（D.ヒューム：宗教についての著作　La Salle 出版社　1992 年　p.85-86）ディドロは、パリ中の人々が自分に奇跡の実在について説得しようとしても、それでも自分は奇跡を否定するだろう、と主張している。（Mc グラス p.140）ホルバッハは、彼が生きていた時代に、奇跡というものはもはや存在しないと考えていた。（Mc グラス　p.140）

第二の批判は、弁神論に基づく議論である。啓蒙主義の哲学者は、宗教には理性では受入れられない多くの矛盾が存在していることを証明しようとした。主な議論は、一般に信じられている神の属性と世界の現実とが調和していないというものである。例えば、神が真に完全で無限に善であるならば、何故神は、悪と罪の存在を許容するのか。ボルテールの主張の本質は、世界はライプニッツが想定するような最善の予定調和の世界では絶対にないということである。

その延長として、１９世紀と２０世紀は、強力な世俗的趨勢にあった。それは、幾度の社会的変化や科学の進歩と関係している。世俗的思想家の中には、宗教の将来を問題にした者もいた。「神は死んだ」という有名なスローガンは、ニーチェによって作り出された。M.ウェーバーは、世界における宗教の影響力は必然的に小さくなっていくことを述べた。同様の考えは、コントやスペンサー、フロイト、デュルケムにも見られる。（M. シェルマー: 「我々はいかに信ずるか」 Typolex 2001 年　p.14）

しかしながら、この趨勢の最大の影響力は、マルクス主義及び共産主義体制にあった。マルクスは、宗教は資本主義政治体制の生存競争に協力していると言って、何よりも宗教の社会的役割を批判したのであって、宗教教義の批判をしたのではなかった。例外はマルクス主義者の C.カウツキーで、彼は、「キリスト教の起源」というタイトルの本を書き、その本の中で彼は、キリスト教の信仰教義とその矛盾を批判している。（Szikra 1953 年）

社会主義諸国の公式見解は、「宗教は必要悪である」ということであった。すなわち宗教は、その社会的必要性ゆえに必要であり、その教義の虚偽ゆえに悪、というものである。（社会主義諸国の中には、「科学的無神論」という大学の学科があるところもあるが、それは全く科学的ではない。）

西洋諸国には、２０世紀以降、新実証主義という重要な趨勢があった。新実証主義は、理性と信仰との関係の問題を直接には扱わなかったが、それでも間接的に哲学の発展に影響を与えた。新実証主義は、３種のセンテンスがあると仮定する。一つめのセンテンスは、証明できるがゆえに合理的である。それに対して、第二のセンテンスは、証明できないがゆえに合理的でない。最後に、第三のセンテンスは、同じく合理的でない（証明できない）が、合理的なセンテンスを構成できるよう促進するゆえに重要である。

結論として、（新実証主義によれば）科学は合理的なセンテンスのみを扱うべきものであって、非合理的なセンテンスを扱うべきものではない。信仰にもとづくセンテンスは証明できないがゆえに、科学によって扱われるべきものではない。したがって、神の存在と属性といった宗教教義は合理的でないゆえに、それらは科学が扱う必要のないものである。（もちろん無神論の概念も、非合理的である。）

C.ポパーにおいても同様の見解が見られる。彼は、合理性の規準は反証可能性にあるべきだと主張している。宗教のドグマは、しかしながら反証可能ではないので、それらは合理的ではない。信仰もまた、反証可能ではない。キリスト教教義もまた、それゆえ受入れられない、というのである。

新実証主義は、信仰の問題を明晰には扱わないけれども、中には、宗教的信仰の重要性を直接否定する学者もいる。それらの議論の一つは、２０世紀における重大な諸発見は信仰とは相容れない、というものである。例えば、B.ラッセルによれば、近代科学技術の所産と新約聖書の奇跡の信仰とを同時に用いることは不可能である、という。(Mc.グラス p.296)

また他には、神の不可解性にもとづく議論もある。M. シェルマーは、次のように主張する。「不可解なものを理解することは不可能である。神はわれわれ人間とは大いに異なった存在である。したがって、次元も異なる存在であり、全知全能であり、いたる所に偏在するような存在である神について想像することなど誰にもできない。」(M. シェルマー p.22.)

他には、非マルクス主義者で、信仰に対する批判と宗教の反動的な役割とを結びつける哲学者もいる。R.ドーキンスは、著書「失望としての神」の中で次のように述べる。「謙遜な信仰者は社会的に危険である。なぜなら、彼らは、ほとんど自殺的な襲撃者であるからであり、いずれにせよ、その主な動機づけは信仰に基づくものであるからである。」そして彼は、ある言及を引用する。「愚かなものを信仰するなら、その人は気が狂っている。多くの人が同じことを考えるなら、それは宗教である。」

それではここで、別の側面から検討してみよう。これらの非難に対する宗教の側の返答はどのようなものであろうか。その返答は、世俗の考えに匹敵するものであろうか、それともより優れたものであろうか。

何よりも、その議論の評価を困難ならしめる難しさというものがある。世俗的な見解の支持者と宗教的な見解の支持者は、お互い同じ言語で語らないので、両者の間では本当の意味での論議は存在しないのである。しかしこの難しさにもかかわらず、両者の議論を比

較せしめるある可能性がある。

第一の宗教の側の議論は、信仰という概念についての日常の使用（belief）と宗教的な信仰(faith)との間の相違にもとづくものである。この２つの概念の間の相違は根本的なものである。前者(belief)は、理性より価値の低いものであり、後者(faith)は理性より価値の高いものである。世俗的な学説の主な誤りの一つは、この信仰（belief）を信仰（faith）と同一視するというものである。この誤りには存在論的な根がある。また、世俗的な学説の他のもう一つの誤りは、超自然的なものの存在を否定するというものである。したがって人々は、超自然的な世界についての概念は疑問の余地のある証明不能のフィクションである、と考える。とはいうものの、神についての概念は、必ずしも証明不能というわけではないことを宗教史が示している。例えば、トマス・アクィナスは、神の存在について５つの証明を念入りに構築したが、しかしながら彼は、これらの証明は宗教にとって最重要なものではなく（それらは議論の余地があるが)、信仰が最重要なのであると強調した。

キリスト教によれば、世界の創造主であり擁護者である神の永遠の統治が地上界に優先するので、信仰によるこの領域の認識も優先する。

超自然的な世界の認識における理性の役割についてはどうであろうか。理性の役割は正反対のものである。理性の諸形態は、神の存在を含めた超自然的な世界の存在を仮定し、神が存在しなければ世界は理解できないと想定する。しかし他方には、理性は、多数の超自然的な現象を説明することができず、それらの存在を疑う。アンセルムスやアウグスティヌス、トマス・アクィナスは共通して、「理解するために信じ、また、信じるために理解する」と考えた。これは、今日までのカトリック教会における公式見解である。(「カトリック教会の信仰教義」　Szent István Társulat　2002 年 p.56.）この学説は、カトリック教会のみならず、統一教会も含めた他のキリスト教会にとっても非常に重要である。

ヨハネ・パウロ法王Ⅱ世がこの問題について回勅を記したことは、この仮定の一つの証明である。法王はある隠喩で始めている。信仰と理性は一羽の鳥の二本の翼のようなものである、と。この隠喩の意味は、「最も重要な哲学的問題についての知識には、必ず、信仰と理性の両方が必要である。なぜなら、片方の翼だけでは鳥は飛べないからである。したがって、信仰と理性は強く結び付いている。」ということである。ラテン語では、„Credo quia intellego”（理解するために信じ)、„Intellego quia credo.”（信じるために理解する）という意味である。(「ヨハネ・パウロ法王Ⅱ世の表明」Szent István Társulat　2005 年 p.431. ）

しかし同時に法王は、信仰と理性との違いも強調している。信仰と理性は同じカテゴリーには属さないゆえ、一方を他方から推論することはできない、という。

信仰の真相を理性では判定することはできないゆえに、信仰の方が価値が高い。信仰のみが、超自然的世界を認識するのに真に適しているのであり、理性ができるのは、信仰のために議論をいくつかもたらすのみである。理性ではなく啓示こそが、超自然的世界を認識する最も重要な手段である。

さてここで、統一教会も含めた諸宗教の議論を検討しよう。宗教は、啓蒙運動や啓蒙主

義者の概念を受入れない。神や宇宙、人類についてのあらゆる哲学的問題は理性で解決できるという主張は、真実ではない。これらの問題に関する認識を得るには、啓示が必要であり、啓示こそが真実である。なぜなら神は決して間違わず、欺かないからである。

奇跡に関して言えば、キリスト教会は、最も偉大なイエス・キリストの復活も含めて、奇跡というものは本物である、と教えている。エリアーデは、「イエス・キリストの復活がなければ、キリスト教という宗教は忘れられていたことだろう。」と述べている。（M.エリアーデ「宗教思想史２」、オシリス出版 1995 年 p.266.）理性が奇跡を説明できないなら、それは、理性の限界を示している。奇跡というものは現在もはや存在しない、という主張も真実ではない。例えば、説明がつかないほど不可解に元の健康な状態に回復するといったケースも存在するのである。

弁神論に関して言えば、世界には理性では解決できないような多くの神秘が存在する、と諸宗教で考えられている。C.ラーナーは、神は最も偉大な神秘である、と主張する。「神は氷山に似ている。伝統的な手法で知り得るのはただ氷山の一角だけである。その他の部分は、永遠に隠されたままである。例えば、聖三位一体の神であるとかサタンの存在や活動等といった神秘がそれである。」

２０世紀初頭に、キリスト教から神秘を除こうとするキリスト教の運動があった。この運動のリーダーであるブルトマンは、「２０世紀の巨大な進歩と神秘とは相容れないものである。したがって宗教の未来を救うためには、神秘はなくすべきである」と論じた。（A.カサノバ 「第二バチカン公会議」 1971 年 p.52.）

しかしながら、この運動は成功しなかった。なぜなら、神秘を宗教から取り除くことは、教会の崩壊につながるからである。

科学技術の進歩と宗教教義との不協和に関する問題を検討すれば、重要な議論が上げられる。例えば、新しい科学技術の発明の中には、以前の世紀の人々なら「そのような発明は絶対に不可能である」と言っていた多くの発明が見られる。（電話とかテレビとかを考えてみればいい）

ドグマに関してはどうであろうか。ドグマは、科学のようには発展しないから非科学的である、というのは真実であろうか。キリスト教は、この前提を受入れない。

まず第一に、ドグマにも、それ自身歴史があり、いくつか発展がある。第二に、そのドグマが神の意志と教えを反映しているならば、ドグマは永遠に真実なものとなる。このことは、実際、科学と宗教との一つの相違点であるが、このことはドグマが科学よりも劣るものであるということを意味するものではない。

「神は死んだ」というニーチェの仮定を検討してみよう。この概念には２つの意味がある。

① 神は、客観的に存在していない。

② 神の存在とは関係なく、人々は神の実在を信じていない。

第二の意味に関して言えば、M.シェルマーは、人々が神の存在を信じたり信じなかった

りする原因・理由を検討し、無神論者や不可知論者は神の存在を受入れなければならないと主張している。彼の主張は、２０世紀末に盛んであり２１世紀でもそのまま続いているように思われる。（M.シェルマー p.33）実際を見れば、信仰者の数は何十億にもなる。にもかかわらず世俗化の趨勢が強いが、しかしこれは宗教の存在を危うくするものではない。

新実証主義とポパーの議論を見てみよう。彼らの議論は、物質界に関しては正しいが、超自然的世界をも考慮に入れるならば、それは正しくないと私には思われる。超自然的な領域は、科学の発展とは関係なく、部分的にのみ、人類及び人間の理性に認識できるし、そのまま未来においてもできるであろう。したがって、新実証主義とポパーの必要条件は、超自然的世界のセンテンスには適用できない。しかしながら、ヴィトゲンシュタインは次のような、非常に有名な考え方を持っていた。「合理的なセンテンスを創造できないならば、沈黙したままの方がいい」、と。おそらくそれは、宗教的な問題に関して沈黙したままの方がいいということであろうか。実際には、宗教的な問題に対する関心は大いに存在しているので、沈黙は非常に誤った解決法である。

ドーキンスの非常に否定的な見解についてはどうであろうか。ドーキンスが、普通の信仰者と自殺的なテロリストとは少しの違いしかないと考えるとき、それは大いに間違ったものであると私は思う。実際は、両者は全く違う。信仰者の大多数は、多くの罪のない人々を殺害することは許されざることであると考えている。

宗教に対する社会主義の政策に関して言えば、社会主義国家は宗教活動を厳しく取り締まり、厳しく制限していた。

社会主義政権崩壊後、状況は宗教に有利な方向に急変した。ハンガリーでは、例えば、１９９０年の法律第四条により、宗教の自由が保障され、教会の歴史的に肯定的な役割が強調された。

ここで私は、理性と信仰の関係についてのキリスト教の概念が、レバレンド・ムーンの教えで統一されていることをいくつかの引用で証明したいと思う。レバレンド・ムーンは、これらの概念は宗教の主な役割と密接につながっていることを強調される。

「神の二性性相の対象として分立された個人の心と体」（原理講論、HAS-UWC、1996年、創造原理　第三節（二）p.34【英語版】）

「したがって、被造世界には、人間の体のような有形実体世界ばかりでなく、その主体たる人間の心のような無形実体世界もまたあるのである。これを無形実体世界というのは、我々の生理的な五官では、それを感覚することができず、霊的五官だけでしか感覚することができないからである。霊的体験によれば、この無形世界は、霊的な五官により、有形世界と全く同じく感覚できる実在世界（なので、この有形、無形の二つの実体世界を総合したものを、我々は天宙と呼ぶ。）」（原理講論、HAS-UWC、1996 年、創造原理　第六節（一）p.45【英語版】）

「人間がはじめに宗教をつくりましたか、それとも、神様が存在するなら、神様が宗教をはじめにつくりましたか。この問題については多くの異なった考えがあります。どちらですか。それは、神様です。元々、堕落がなかったならば、宗教は必要なかったのです。」（- Gathering for Reading and Learning Series, Volume 4 -Unification family life, FFWPU 1998, p. 7.）

「神様の善なる要素と一つになることができない人は、天一国に入ることはできないのです。」（p.8）

「私たちは、堕落して、神様から離れ、罪人となったために、善なる人となって、神様のもとに帰るべきなのです。。。それでは、宗教の目的とは何でしょうか。それは、人類を救い、人類を神様の元に帰すことです。」（p.9）

「宗教の使命とは何でしょうか。宗教には、人類を神様と一つにつなげ、人類を神様の本質と神様の使命につなげる使命があります。」（p.11）

「宗教の目的は、内的な領域を徹底して探究することであり、イデアの世界を探し求めることであり、最終的に創造主を見出すことである。」（p.12）

「私たちは統一を願うならば、問題は人間のうちにあるということを知るべきです。国家が統一される前に、統一された家庭がまず実現されなければならず、家庭が統一される前に、統一された個人が存在しなければなりません。」（Gathering for Reading and Learning Series, Vol. 2, Part 1 -Way of Unification, FFWPU, 1998. p. 211）

最後に、誤った信仰に関して少し述べておきたい。ハンガリー語では、信仰（belief）と信仰（faith）とをはっきり区別するような単語はない。（英語の belief と faith という）両方の語は、ハンガリー語では „:hit.” という同じ一つの単語になる。したがって、超自然的世界に関わる真理に行き着くようなより価値の高い信仰（faith）と、有害な偏見や活動を生み出してしまうような誤った信仰（belief）との間には、根本的な違いがあるということを強調しておく必要がある。G.オルポートは、偏見についての彼の著書の中で、偏見と誤った信仰とを同じものとして扱っている。彼は、偏見を、他者や他の集団について十分な証拠なしに、悪いもの、間違ったものであると信じること、と定義している。偏見によって人々は、ある集団に属する人は、その集団の全ての悪なるものによって性格づけられているのだと信じてしまう、と後に彼は述べている。（G.M.オルポート「偏見について」 オシリス出版 1999 年、p.34.p.36.）

【結論】

信仰（belief）と信仰（faith）は、ハンガリー語では同じ一つの単語になるけれども、それでもその二つの概念の間には、特に信仰（belief）が誤っているときには、大きな違いがある。

我々の元来の問題に帰るならば、レバレンド・ムーンに合意することができる。理性と

信仰は一つに統一されるが、しかし信仰（faith）の方がより重要で価値がある。